ギャラリートーク③

外交官アーネスト・サトウが見た明治日本

――江戸開城談判から条約改正まで――

イアン・ラックストン

こんにちは。よろしくお願いします。ここで講演するのはたいへん光栄です。ありがとうございます。

きょうのテーマは「外交官アーネスト・サトウが見た明治日本　江戸開城談判から条約改正まで」ということで、一八六八年から一八九九年までを中心にお話しします。条約改正は世紀末にだいたい終わるのですが、その少し前の一八六二年にアーネスト・サトウが来日して以降、そして引退生活についても話したいと思います。

きょうの話のアウトラインです。まずサトウの生涯のあらましと、折々に撮影された写真を紹介します。そして、この聖徳記念絵画館の中にある絵画とサトウとの関係を紹介したいと思います。サトウと江戸城無血開城に関しては、観察者としての彼の役割を説明します。続いて、一八七〇年代のサトウと一八八〇年代のサトウ。これは日本においてのサトウですけれども、とくに岩倉使節団との関係と西南戦争等の関係に集中したいと思います。彼の旅行日記、いろいろなところを訪れたので、それも紹介したい。そして最後に、アーネスト・サトウが一八九五年に日本に戻って、特命全権公使として務めた五年間についても説明したいと思います。

アーネスト・サトウの生涯ですが、一八四三年にロンドンに生まれ、十八年後の一八六一年、ロンドン大学のユニバーシティ・カレッジを卒業して、通訳生として外務省の領事部門に入って彼の日記が始まります。イギリスのサウサンプトンという港町から出て、最初は中国に行きます。約八ヶ月間中国にいましたが、中国人は誰も日本語が読めない状況でしたので、中国にいても日本語習得の効果がなく、すぐに彼とあと二人ぐらいが日本に行くことになりました。一八六二年の九月に日本に到着。これは全部『A Diplomat in Japan』という彼の回想録に書いてあるとおりですけれども、ちょうど生麦事件の一週間ぐらい前に着きます。

その後、外交官サトウが経験した幕末、明治維新について記されたものとして注目を浴びるべきは、「英国策論」というテキストです。簡単にいうと、彼が当時の「ジャパン・タイムズ」に掲載していたものなのですが、いまの

「ジャパン・タイムズ」と違う新聞です。いまの「ジャパン・タイムズ」は一八九七年からだと思いますけれども、当時は同じ名前の別の新聞の編集長に誘われてそこに記事を書きました。タイトルはなくて、サトウの名前は英文には出てきません。一八六六年に三回記事が出ましたけれども、「英国策論」はあとでサトウ自身と彼の日本語の先生が阿波の大名のために日本語訳したものです。そのあと、なぜか翻訳が日本中に回るようになって、非常に大きな影響をもった。もともとタイトルがないのに、日本語訳に「英国策論」というタイトルがつけられて、いろいろな影響力のある人がそれを読んで、これが英国の日本に対する公式な政策と誤解されたわけです。その中に、誰が日本の代表かという問いがあって、帝と諸大名が適切じゃないかと応じる文が書いてあった。これは一八六六年ですから、明治維新の二年前の話なので、興味深い部分だと思います。

サトウは一八七〇年から八三年のあいだ、日本語書記官として英国公使館に勤めていました。この詳しいことはあとで紹介します。

そして、シャムに赴任して、四年間ぐらいシャムにいました。その時、英国外務省の領事部門から外交部門に昇格しました。つまり、公使の一種なので、通訳官というレベルではなく、もっと上の階級になりました。その後ウルグアイ、モロッコにも赴任し、一八九五年に日本に戻ります。そして特命全権公使となります。つまり、イギリスのトップの外交官ですね。当時、大使の階級はありませんでした。一九〇五年から在日英国大使、同時にロンドンに在英日本大使が設けられました。サトウは不運なことに初代大使にはなれませんでした。

一九〇〇年から〇六年まで外交官としての最後の任務ですが、義和団の乱のあと中国に赴任し、そこの公使となりました。

一九〇六年に引退してから二九年に亡くなるまでは、ずっと英国のデヴォンで、別のキャリアを始めました。国際法と外交の学者です。彼は一九〇七年、ハーグの第二回平和会議に英国の代表の一人として参加しています。なお、彼の日記は一九二六年に完全に引退する日まで及びます。そして一九二九年に亡くなります。

サトウの顔写真を見せたいと思います（図1）。まずは十八歳ですね。一八六一年の若いアーネスト・サトウです。顔を見たらわかると思いますが、けっこうシャープな賢そうな若者ですね。

図1　1861年
（横浜開港資料館所蔵）

次は一八六三年に日本で撮られたもの（図2）。たしか友人のウィリアム・ウィリス、医学の先生が撮った写真です。

その次の写真はパリで撮影されたもの（図3）。最初の日本の任務を終えて英国に戻ったのですが、途中でパリに行ったときの写真。初めてひげがありますね。

その次はシャムの任務時です（図4）。一八八三年から四年ぐらいの時。これは四十歳ですね。

一九〇〇年のものは、「イラストレーテッド・ロンドン・ニュース」という雑誌に出た写真です（図5）。彼は日本の任務を経て次は中国ですけれども、そのあいだロンドンに一時帰国しました。

一時帰国した一九〇三年の写真（図6）と、図7は、スパイという画家が描いた、わりと面白い絵です。太ってはいない。それとわりと背も高かった。六フィート。つまり、メートルでいうと一・八メートル以上です。

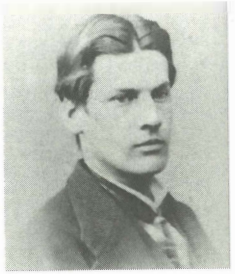


図2　1863年
（鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵）

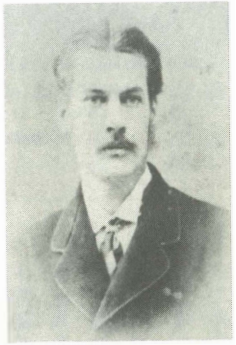


図3　1869年
（横浜開港資料館所蔵）

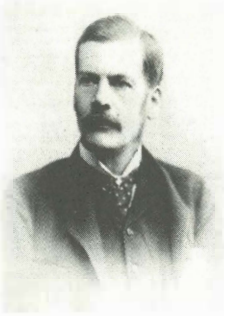


図4　1883年
（横浜開港資料館所蔵）

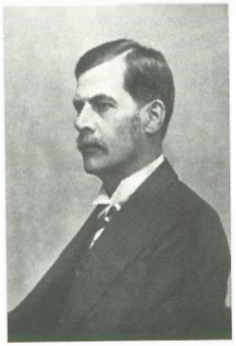


図5　1900年
（*Illustrated London News*, 1900所収）

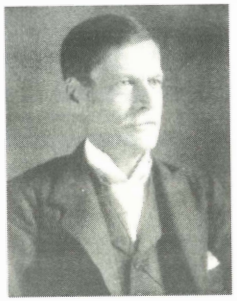


図6　1903年
（『維新日本外交秘録』維新史料編纂事務局、1938年所収）

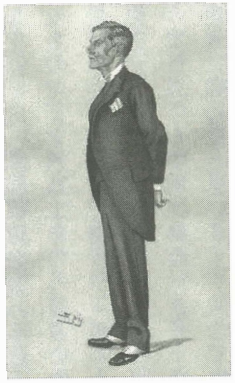


図7　1903年
（*Vanity Fair*, 1903所収）

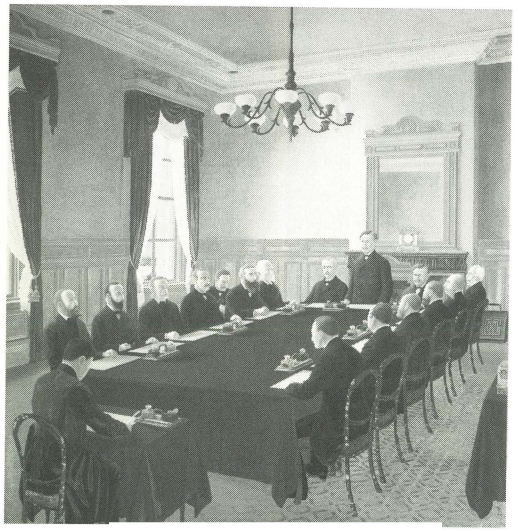


図８　条約改正会議（聖徳記念絵画館所蔵）

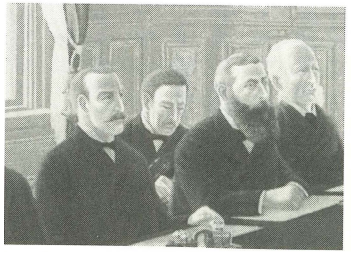


図９　左から２番目がサトウ

さて、聖徳記念絵画館には壁画が八十枚あるのですが、四十枚は日本画、四十枚が洋画です。サトウは四十六番目、つまり条約改正会議に出ます（図８）。この中にいますが、見えますでしょうか。

次のスライドでもっとはっきり見えます（図９）。条約改正会議の予備会議で、上野広一が描いたもので、一八八二年の外務省を舞台とする絵です。井上馨は立っています。隣はシーボルト。シーボルトには二人兄弟がいましたけれども、たしか兄のアレクサンドルのほうだと思うんです。弟のヘンリー・シーボルトも日本の外務省に勤めたと思います。残念ですが、サトウのこの日の日記、つまり明治十五年の四月五日には何も記入されてないです。ただ、その前の一月二十五日、二月一日と二日の会議については書いてあります。サトウの日記には一か月以上のブランクもあるから、それは不思議ではないですけれども、ちょっと残念です。

この絵にはサー・ハリー・パークスも描かれています。図10の写真と比べてみると、ヘアスタイルが同じです。

また、ドイツ公使のアイゼンデッヘルもいます。サトウは下を向いていますね。だから、よく見えないのですけれども、図４と比べて、ヘアスタイルは一緒なので、このイメージはあったんじゃないかと思います。

『聖徳記念絵画館オフィシャル・ガイド』には、こういうふうに書いてあります。「井上馨の左隣は通訳シーボルトです。画家の上野広一は、各国代表の子孫から当時の顔写真を集め再現に万全を期しました。」それと、奉納者は侯爵井上勝之助。昭和六年（一九三一）に完成しました。

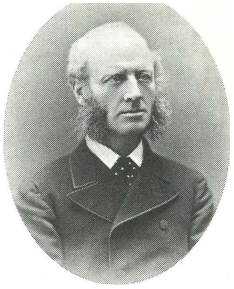
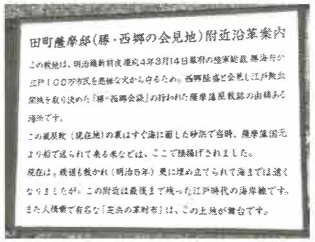


図10　パークス
（*The life of Sir Harry Parkes, sometime Her Majesty's minister to China & Japan*, 1894）

次に、サトウと江戸城無血開城について、お話しします。図11は、私が撮った写真です。先日、たまたま東京で取材をしたときに見つけました。これは昭和二十九年につくられたもので、西郷と勝の江戸開城についての記念碑です。場所は、ほぼ皆さんは東京に住んでいるからわかると思いますが、田町駅の近くにあります。いまは三菱自動車が所有している土地にあります。

それと、図12も私が撮った写真で、石碑（図11）台座に書かれています。田町に薩摩邸があって、そこで西郷と勝が慶応四年三月十四日に会って、当時、世界でいちばん大きい都市を救うために交渉した。その裏は海に面した砂浜で、当時、薩摩は米とかそこに下ろしていて、鉄道も後につくられました。いま現在はもちろん海はここから遠いと書いてあります。

図11　江戸開城会見之地碑



田町薩摩邸（勝・西郷の会見地）附近沿革案内

この敷地は、明治維新直後、明治4年3月14日薩摩の強家老桂久武、勝海舟が江戸100万市民を悲惨な火から守るため、西郷隆盛と会見し江戸無血開城を取り決めた「勝・西郷会談」が行われた薩摩藩屋敷跡の由緒ある場所です。

この蔵屋敷（現在地）の裏はすぐ海に面した砂浜で当時、薩摩藩国元より船で送られて来る米などは、ここで陸揚げされました。

現在は、埋立も進められ（明治5年）更に埋め立てられて海までは遠くなりましたが。この附近は最後まで残った江戸時代の海岸線です。

また大隈重信の「芝浜の茅町巷」は、この土地が舞台です。

図12　同碑　解説

図13も私が撮った写真で、さきほどと同じ台座にありました。左に西郷、右に勝海舟。その交渉の様子です。山岡鉄舟が駿府城まで行って、三月九日頃に会議を準備した。サトウの役割が気になりますけれども、もちろん、彼がこの二人をひきあわせたわけではないです。ただ、その二人とサトウが知り合いということは間違いない。

この写真のオリジナルの絵は、この絵画館の十三番の絵ですね（図14）。最近、「西郷どん」の中でこのシーンが演じられました。

西郷と勝、二人ともサトウの知り合いでしたが、以下は彼の日記の引用です。「三月三十一日、私はパークスと横浜に戻って、その翌日江戸まで行って状況を探り出す。主な情報源は勝安房守、勝海舟です。彼は徳川の海軍の経験があった」。これはたしか、勝海舟が神戸にいたとき。そんなに長くはないと思いますけれども。人目につかないように夜、彼の家まで行った。元将軍はすでに三月四日に帝

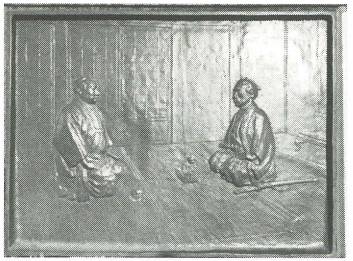


図13　同碑　レリーフ

図14　江戸開城談判（聖徳記念絵画館所蔵）

の、つまり天皇ですが、命令に従うつもりだ、天皇に抵抗しないと宣言した。江戸の市民は大きな火事を懸念していた。自分の持ち物を家から運んでいた人もいたが、店はまだあいていたし、パニックは広まっていなかった。私は四月十二日から三日間江戸に滞在していたが、町はだいぶ落ち着いていた。『A Diplomat in Japan』に記されています。

サトウとパークスの関係ですが、サトウは上司のパークスに報告しますけれども、本人はもちろん交渉に入らないです。勝はサトウに慶喜を守るために戦うと言っていましたが、西郷が内戦の長引くような要求はしないと言いました。勝はパークスに帝の政府が大惨事とならないように依頼しました。パークスは帝の政権に何度も申し入れをしている。つまり、サトウからの報告に基づいて、勝の依頼も入っていますから、パークスが動いたということですね。

次に一八七〇年代と八〇年代前半明治維新後のサトウです。キーワードは、「合間」、「幕間劇」です。今年亡くなったサー・ヒュー・コータッツィ、有名な英国の学者ですが、元駐日英国大使でもありました。彼は「合間」という言葉を使いました。何の合間かといいますと、幕末のエキサイティングな時代、一八六八年までの時間とその次のバンコクの総領事になったときの合間ですね。彼はこのあいだ日本語書記官として勤めました。この肩書きが示すとおり、通訳と翻訳の仕事でした。たとえば日本の新聞を要約したりして、公的な日本の書類を翻訳して、時には通訳もしました。

勤務時間はあまり長くはなかったようで、公使館で午前十時から午後四時までのあいだ。わりと長いあいだ東京から離れることができたし、日本の内陸というか中央というか、そういうところはよく旅行できました。当時はまだ内陸を移動するのは難しかったし、時間もかかったから、長い期間東京を離れることも許されたのです。

そして、西南戦争です。サトウがヨーロッパから戻るのは一八七七年の一月。パークスに鹿児島に行くように命令されて、薩摩の乱の始まりを自分の目で確かめた。そのあと東京に着いたときに何を見たか報告しました。

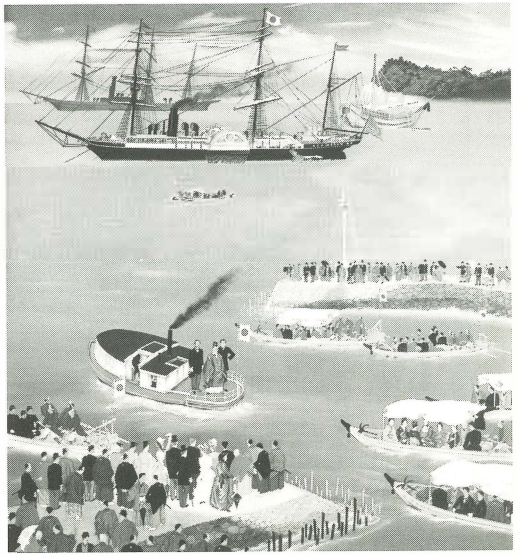


図15　岩倉大使欧米派遣（聖徳記念絵画館所蔵）

図15は、壁画の二十一番、岩倉大使欧米派遣です。画家は山口蓬春。

岩倉使節団が横浜港から出てアメリカとヨーロッパに行く。「アメリカ」という船に乗るところです。大雑把にいうと目的は二つあって、まず「五箇條の御誓文」に書いてあるとおり、「智識を世界に求め、大に皇基を振起すべし」。それが一つ。つまり、知識を得るために西洋のいろいろな国の科学、鉄鋼学など、技術を深く理解するためと、不平等条約の改正交渉を始めること。これは最初にアメリカに行ったときにちょっと失敗があって、委任状を持参していなかったから取りに戻っている間、不平等条約の改正交渉は無理となりました。

サトウと当時の代理公使アダムズは岩倉が出発する前の一八七一年の十一月二十六日に一緒に食事をして、その使節団についていろいろ話しました。あと、十二月五日、サトウが横浜に行って、岩倉が洋服についてサトウに相談したらしいです。この二つもサトウの日記にあります。

この絵には大久保、岩倉、木戸孝允の姿が見えます。

津田梅子はこの赤い着物です。

サトウと津田梅子の話ですが、一八九八年に津田梅子の

図16　岩倉使節団（山口県文書館所蔵）

お父さんの津田仙と会って、梅子が英国に行くという計画を議論しました。実際に津田梅子は渡欧し一八九九年一月から四月のあいだ、オックスフォード大学で勉強しました。そのあと女子英学塾を創立しました。いまの津田塾大学です。

図16は有名だと思いますけれども、木戸孝允と山口、岩倉、伊藤、大久保ですね。

使節団は八月十七日に英国に到着、十二月十六日にフランスに出発します。四か月ぐらいですね。サトウはこの間日本に駐在していて、江ノ島を訪問したり大隈重信と山尾雇三と英国人リチャード・ブラントンがデザインした灯台を見学しました。たしか下関まで船で行きました。

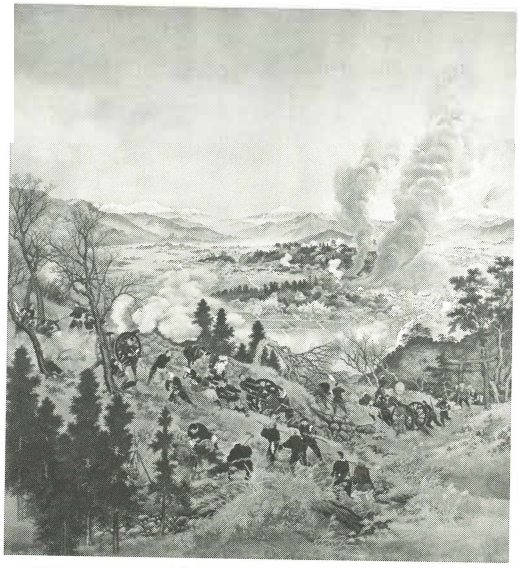


図17　西南役熊本籠城（聖徳記念絵画館所蔵）

図17はギャラリーの三十七番、近藤樵仙の絵です。

サトウはパークスに薩摩の状況を観察するように命じられた。日記によると、一八七七年の二月二十一日に、赤く染まる空を見ています。つまり、熊本が燃えていることを意味しています。戦いを起した西郷をはじめとする薩摩の士族と戦うために八千人が新政府から派遣され、二十二日以来、熊本で戦っています。それから、東京までサトウが来て、三月三十一日、昔からの友人勝安房（勝海舟）をもう一回訪問する。その時谷干城が切腹したと耳にします。

これは後に誤報であると判明しますが。勝はサトウを通してパークスに戦いを止めるように頼もうとしている。パークスが岩倉にその旨をすでに二十四日に言ったと聞いて安心したみたいです。つまり、二度目の勝海舟からサトウを通してパークスへのお願いです。前の江戸城無血開城と同じようなことを、勝海舟がパークスに依頼しています。

一八七〇年代のサトウの日記はこういうものが多いです。例えば、一八七四年九月二十四日。その前はその年は一切ないんですが、ヘイラーズという友人と日光に行く。人力車に乗って、埼玉県の幸手に着く。旅館はよかった。アサヨロズ・ソウジロウという旅館の亭主の名前や、警察が許可証を要求したこと、人力車の値段が三両半だったことなども記されています。翌日、人力車で幸手を出て、野木と間々田のあいだでティフィン。ティフィンは軽い昼御飯です。宇都宮には夜七時半に着く。ずっと人力車に乗っています。

その翌日日光まで行ったのですが、一部は歩いて、一部は駕籠で。また軽食をとって、その値段。それから友人が手帳をなくしたなんてことも書いてあります（笑）。町のお役人とも会っています。

二十七日は憾満ヶ淵まで行って、午後は東照宮でいろいろなものを見る。帝から家康にくだされた着物とか東照宮の神輿、面、天球儀、護摩堂、神楽殿を目にします。そういうことが典型的なサトウの日記です。

サトウが特命全権公使として日本に戻るのが一八九五年の七月ですけれども、その前の年に日英通商航海条約が青木周蔵とキンバリー公で調印された。それが治外法権の撤廃の条約です。その条約は一八九九年から発効することで合意されました。ですから、一八九九年の七月十七日から日本にいる英国人はみんな日本の法律に従うことになったわけです。英国の司法権または管轄がほぼ終わって、その代わり英国人は日本の司法に従うようになりました。これで条約改正の大部分が終わりますが、英国が最初にこういう条約を調印したことになります。そのあとフランス、ドイツ、オーストリア、ハンガリーなどが同じような条約を日本と調印しました。

これは日英関係としては日英同盟を結ぶ必要条件といっていいと思います。一九〇二年に日英同盟が調印されたとき、両国は対等に同盟できた。同盟は不平等な関係があるとできないということです。

図18は下関講和談判、六十二番の壁画です。

図18　下関講和談判（聖徳記念絵画館所蔵）

下関市が奉納しています。これは陸奥宗光、伊藤博文、あと李鴻章ですね。日清戦争は一八九四年から始まり、一八九五年の四月十七日に終わりました。場所は日清講和記念館。これは春帆楼という旅館の土地にある別の建物です。訪問することができます。この講和交渉とそのあとすぐ起こった三国干渉が、サトウが日本に戻る前の背景としてありました。そして、日本で公使として五年ぐらい務めて、サー・クロード・マクドナルドとポストが入れ替りました。マクドナルドが日本の在日公使になって、サトウが中国に赴任するわけです。

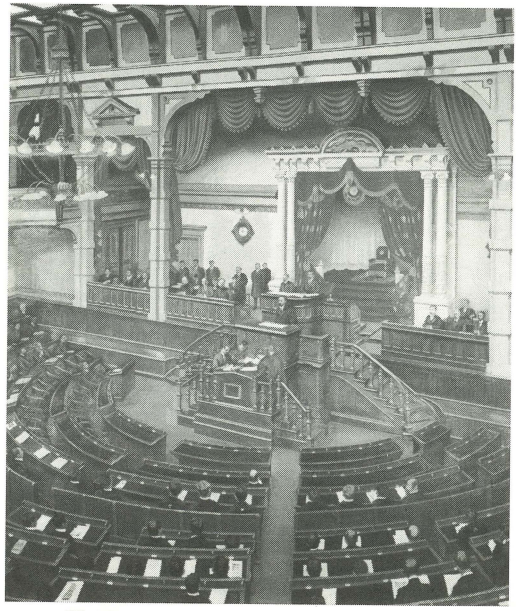


図19　日英同盟（聖徳記念絵画館所蔵）

図19は日英同盟。壁画の六十六番です。

首相の桂太郎が日英同盟を貴族院に報告します。その承認は必要なかったらしいです。単にこういうふうにつくりましたと言う。だから、報告ですね。その日英同盟は一九〇二年の一月三十日にロンドンで林董とランズダウン侯が調印しました。この同盟の意味は、日本にとってはロシアとの戦いが自信をもってできるようになったと私は思います。あと、サトウは当時、北京にいまして、二月十一日の日記にこういうふうに書いています。内田、つまり在清国全権公使であった内田康哉が日英同盟の英文テキストをサトウのところに持ってきており、それを読んだサトウは、お互いに助けるような同盟だと感じたようです。不思議だなと思うのは、サトウは一切この交渉に関係していない。英国側で誰もサトウに相談していないのです。だから、サトウがそのテキストを初めて見たのは署名されて十日後ぐらいです。

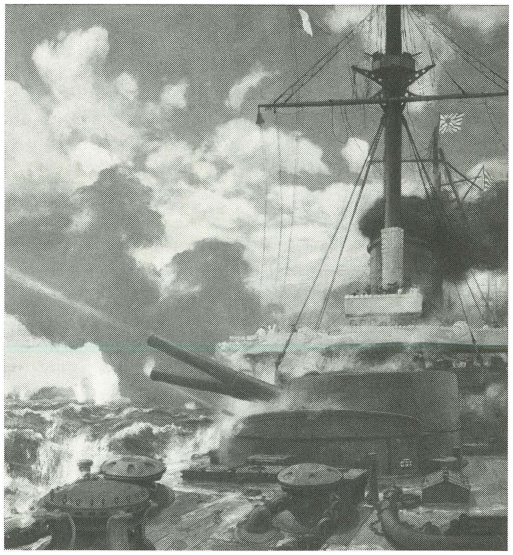


図20　日露役日本海海戦（聖徳記念絵画館所蔵）

図20は、壁画七十一番。明治三十八年（一九〇五）五月二十七日の日本海海戦です。

この海戦では、英国で訓練した東郷平八郎司令長官率いる連合艦隊がバルチック艦隊に圧勝しました。日露戦争に関してサトウが友人フレデリック・ディキンズに宛てた手紙が何通か残っています。

まずは一九〇四年六月二十四日の彼への手紙で、陸戦でこれだけ日本人が成功するとは思っていなかった、と書いています。日本は三つの大きな戦いで敵に勝利し、武器と捕虜を獲得したのです。同年七月二十日に再びディキンズに、日本人はたしかに非常に能力のある人種で、劣勢に追い込んでも完全に制御することは難しい、と記しています。三通目も、日本海海戦の前ではありますが、一九〇五年の一月二十七日に、日本がこのロシアとの戦いに立ち上がったことは世界のバランスを崩すことであり、火星が太陽系を乱すような出来事だ、という趣旨のことを書いて送っています。

図21は、ポーツマス講和談判の壁画、七十二番です。

全国で騒擾事件が起こりました。ポーツマス条約が締結された際に、領土も賠償金も充分に得られなかったことに

図21　ポーツマス講和談判（聖徳記念絵画館所蔵）

対する国民の不満があったからです。サトウはやはりディキンズに一九〇五年十二月六日の手紙でこういうふうに書いています。ザ・タイムズの特派員のモリソンも含めて共通の意見は、賠償金をロシアから得るのは無理だろう、と。その理由として、充分価値のある土地をとることができなかったことを挙げています。日本は、兵士や兵力、弾薬、軍資金などが不足し、結局ウラジオストクを獲得することができなかった。ただ、ロシアの交渉団長であるウィッテとは非常に重要な部分で合意した。つまり、日本に遼東半島を譲り、朝鮮半島の支配権を日本に渡す。それから満州鉄道の半分も割譲しました。これだけでも日本の外交は成功していると記しています。よって、サトウは各地で起こった騒擾事件は国民の誤解に基づくものではないかと考えていたようです。

さて、ここでサトウの履歴を再度確認してみたいと思います。英国外務省の一九三〇年の外務省職員リストによると、彼は一八四三年に生まれ、ロンドン大学で学士号を取得。その後、試験に合格して通訳生となります。一八六三年に英国海軍が鹿児島を攻撃した時、鹿児島に行っています。公使館の通訳官になったのが一八六五年四月一日で、三年後の一月一日に書記官になっています。一八六四年の九月にはクーパー提督の通訳官として下関に行きます。それから一八七七年に二等書記官に昇格。

一八八四年、シャム総領事として着任。一八八八年にはウルグアイのモンテビデオに公使として赴任し、一八九三年、モロッコへ行きます。日本に戻るのは、外務省職員リストによると一八九五年の七月一日。但し、実際に着任したのはその一か月後でした。この年はビクトリア女王が一八三七年に女王となって五十年目のお祝いがありましたので、サトウはその式を自分の目で見るためにロンドンに滞

在していたからです。サトウは英国政府から勲章も受章しており、一八八三年、一八九五年、一九〇二年にそれぞれ、聖マイケル・聖ジョージ勲章の第三勲位（CMG）、第二勲位（KCMG）、第一勲位（GCMG）が贈られています。最後の勲章の授与は、一九〇一年にビクトリア女王が亡くなっていたので、エドワード七世からでした。

一九〇〇年十月二十六日に中国赴任し、一九〇六年に枢密院のメンバーとなっています。

外交の舞台から引退するのは一九〇六年十月二十六日です。その後、ハーグの裁判所に英国の代表として赴任しましたが、実は一度もその裁判に関わっていません。その代わり、ハーグの第二平和会議では英国代表の四人のうちの一人を務め、その詳細が日記に残っています。亡くなったのは一九二九年でした。

サトウが日本に来たタイミングは非常によかったと私は思っています。生麦事件のちょうど一週間ほど前に訪日しており、それから幕末に起こった主な出来事をほぼ全部みることができた。これらの見聞をすべて日記に書き記し、それに基づいて書かれた回想録が『A Diplomat in Japan』です。出版されたのは一九二一年でした。

一八六〇年代と七〇年代、彼の仕事は条約と関係が深い。日本においては条約改正が外交の主な仕事でありました。サトウは先ほど言及した英国策論にみられるように条約改正に関わるようなこともしていました。それはもちろん彼がやるべき仕事の範疇を超えているものでしたので、『A Diplomat in Japan』の中では、こういうことはしてはいけない、と本人が認めています。

今年私は、一九一二年から二〇年までにサトウによって書かれた日記を出版しました。この八月、私はエクセターで開催された英国の国際歴史グループの学会でサトウに関する発表をした後、オタリー・セント・メアリーに行き、この彼の日記について発表しました。小さな町で聴講者は十人くらいでしたが、歴史に興味ある人達でしたので、大いにサトウが残した言葉を共有することができました。

彼は明治時代が終わる六年前に引退しますが、ほぼ明治時代のすべてのことを外交官として眺めることができたわけです。日本人の妻や息子二人もいました。妻は武田兼といいます。ただ、妻といっても、当時は外交官が異国人と結婚することはできなかったので、正式な結婚はしていません。それでも当然、日本を離れてもずっと日本のことを気にしていたでしょう。ウルグアイやモロッコから日本の情報を得ることは、インターネットなどがない当時のこと

図23　1924年
（横浜開港資料館所蔵）

図22　ボーモント・ハウス
（横浜開港資料館所蔵）

なので難しかったけれども、武田家や彼の家族、日本の友人をはじめ、ウィリアム・ジョージ・アストンとフレデリック・ディキンズたちとは手紙で繋がっていました。シャム、現在のタイに勤務しているときは日本からそれほど遠くないので、休暇の時に二回訪日し、英国に帰国する際も日本を経由しています。

図22はアーネスト・サトウが引退した後の家です。今は三世帯が分かれて住んでいます。庭もそれぞれに分与されています。サトウが増築した部分はloggia（ロジア）といって、彼が読書をしたり執筆をしたりするためのものでした。図23からは彼の引退生活が窺え、書棚が後ろに見えます。一九二四年の写真ですから、八十一歳のときでしょうか。日記にもこの頃のことが記されています。